

「わかる」ということの多層性について (II)

——弁証法的な身体の現象学の立場からの基礎的考察——

矢 谷 慈 国

On the Multiplicity of Understanding (II)

: A fundamental study from the dialectical phenomenology of Body

Yoshikuni Yatani

目 次

序章 「わかる」「しる」ということばの検討から

第一章 連続 (continuum) と分節 (articulus)

第二章 生活世界概念の整理 (第1図)

第三章 連続と分節, 主観性と相互主観性, 生活世界の類型区分から「わかる」ということの多層性を考える (第2図)

I 科学以外的生活世界あるいは非歴史的, 普遍的, 形式的, 不変的な人間存在の生きられた体験の基本構造

I-A 主体のあり方

I-B 「わかる」及び分類体系

I-C 時間(意識)体験における連続と分節

I-D 空間体験における連続と分節

(1) 知覚体験における連続と分節

i) 心理学と現象学, 知覚, 感覚のとらえ方の相違 (第3図)

ii) 各々の知覚状態における連続 (図地未分化) と分節 (図地分節)

iii) 触覚(二重感覚), 運動感覚, 平衡感覚, 有機感覚

iv) 共通感覚(主観性)と常識(相互主観性)

v) 主観性, 相互主観性, 客観性と分離, 同定, 命名 (以上前号)

(2) 身体体験における連続と分節 (以下本号)

i) 〈身〉ということばの用法の多義性と多層性: 関係存在としての身

ii) 錯綜体としての身: 身の統合

iii) 身分け: 身による世界の分節と世界による身の分節

iv) 身の内と外: 伸だちされた身の拡張

v) 身の統合の社会文化的次元(身体技法): 身は文化によって形成されつつ文化を形成する。

(3) 生きられた世界体験における連続と分節

I-E 自己体験と他者体験における連続と分節

(1) 発生的社会化: 自他未分化の共生的な中心化——脱中心化, 関係化——再中心化

(2) 構造的社会化: 我と汝の視界の相互性

(2) 身体体験における連続と分節

前稿 I-D, (1)知覚体験における連続と分節¹⁾では、個々の知覚様態における連続（図地未分化）と分節（図地分節）の記述から始めて、個々の知覚が具体的な生活的意味的行為連関では中村雄二郎のいう共通感覚²⁾として統合されて機能すること。その際、意識化されたり、自覚化され、図化されるレベルでは、諸感覚の「主体的主語的視覚的統合」が優位を占めるが、それは意識化されないレベルでの「基体的述語的体性感覚的統合」の地によって支えられていること。本来個人主体内部での諸感覚の統合を意味する共通感覚（センス・コム・ヌス）は同時に相互主観的社会的なコンセンサス（常識）としての意味を持ち、それは基本的に同様の身体と感覚（知覚）能力を持った人間と人間の〈間(inter)〉の領域³⁾において成り立つものであること。さらに、主観性、相互主観性から客観性が成立する過程を Strasser の分析にしたがって、人間の体験の基本的なレベルで行われる、分離（分節）、同定、命名の過程から説明し、主観と相互主観性、個人と社会、精神と物質（身体）の区分といった二元論的実体化を排し、それらは弁証法的な相互関係の中でのみとらえられるものであることを示した。その際記述を貫く鍵となった視点は「生きた身体をもって世界の中で他者と共に生きる人間の基本的な体験構造に見出せる原初的な分節の体験を、その分節化を支え、そこから諸々の分節が可能となる、より自覚化しにくい⁴⁾がより基底⁵⁾である、連続の体験との関わりでとらえること」であった。

i) 〈身〉ということばの用法の多義性と多層性：関係存在としての身

個々の主体が体験する知覚や感覚、それらを統合する共通感覚の働きを支える基体には身体があり、さらに個々の主体が世界と関わり、世界体験を分節化し意味づけ、やがて身体の拡張としての道具や機械を作り出したり、他者と関わり、他者との〈間(inter)〉の領域に共通の記号や象徴を発達させ、相互コミュニケーションをもとに社会制度や組織や文化的な形成物を作り出すに至る前提にも身体が存在している。

人間が身体をもつのではなく、人間は身体であり、身体に住み込む存在 (Merleau-Ponty)⁶⁾である以上、どのように高度な超越 (Schutz)⁷⁾が達成されていようと、そこには常に身体が伴われているし、身体を貶め、身体を否定しようとするような上昇飛行的な思考ですら、思考者の身体なしには可能ではない⁸⁾。したがって、身体は人間の経験可能性の全体を支える基盤であると同時にその超越論的制約 (Landgrebe)⁹⁾でもあるといえる。

日本語の〈身¹⁰⁾〉ということばの用法の多層性と多義性の中に身体¹¹⁾の物質性から社会性、自己性や精神性、さらに人間の全身全霊（丸ごと全体性¹²⁾）を指摘したのは市川浩の業績である。

市川は、日本語の「からだ」や英語の「Body」が単層的に、物的な身体を意味してきたのに対して〈身¹³⁾〉ということばの用法が実に多彩であり、人間の経験可能性の拡がりに対応するものをそなえていることを次のように指摘している。

① 「果物の実」 「おつゆの実」これは身と同根であり、中身の詰まった自然的存在や内容を

意味する。

- ② 「魚の切身」「酔で魚の身をしめる」などの用法では、身は生命のない肉を意味する。
- ③ 「お臀の肉」「身節が痛む」などの用法では、生命のある肉体を意味する。
- ④ 「身もちになってその結果、身二つになる」などの用法では「肉」というよりも少し「生き身」という感じで生きているからだ全体を意味する。
- ⑤ 「半身にかまえる」「身もだえする」といった用法では、生き身のさまざまな「身様」、からだのあり方を意味している。
- ⑥ 「身丈」「身ごろ」「身ぐるみ置いていけ」などの用法では、着物やその他身につけているものを意味する。
- ⑦ 「身あつてのこと」「身の代金」などの用法では身は人間の生命そのものを意味している。身の代金はまさに命の代金である。
- ⑧ 「身すぎ世すぎ」「身売り」などの用法では、社会的存在、生活存在、労働存在としての身を意味している。
- ⑨ 「身つから(自ら)」「身がまゝ」「身のため人のため」などの用法では、自己あるいは自分を意味している。
- ⑩ 「身ども」「身が等」「お身」などの用法は、私、われわれ、なんじをそれぞれ意味し、身がそれぞれの状況でとる人称的位置を示していることになる。その意味で身は多層人称的な構造をもっているといえる。
- ⑪ 「身内」「身の方(味方)」などの用法は社会化した自己を意味する。身内は本来は血縁を意味するが地縁(村)や擬似血縁(やくざ集団など)の仲間をさすことになる。
- ⑫ 「身のほど」「身を立てる」などの用法は社会化した自己が社会の中で持つ地位とか役割、分際、分限などを意味している。
- ⑬ 「身にしみる」「身をあわす」「身をこがす」などの用法は、ほとんど心と同じ意味につかわれ、身を心と置きかえても意味の大要は変化しない。しかし「心にしみる」よりも「身にしみる」の方が、意識レベルのみならず無意識レベル身体レベルを含めた切実さのニュアンスが伝えられる。
- ⑭ 「身をもって知る」「身をもって示す」というような用法では、身も心も含めた全体、全身全霊としての人間の全体存在(丸ごと全体)を意味するに至る。

以上のような多義的多層的な〈身〉の用法の列挙は、日本語が身ということばをメタフォリカルかつ不節操に拡大使用している、あるいは過剰連合的に、本来根本的に異なる対象に無差別に適用していることを示すがゆえに、日本語の非論理性を例示するものだと解釈する立場もあるだろう。伝統的な心身二元論的な思考様式からすれば当然そういう批判が加えられる。そしてこんなにも多義的で無差別に何にでも適用される概念は、厳密な学問的思考を展開するの

にふさわしくないものとして排除さるべきであることになる。

しかし市川は従来使われてきた「身体」や「からだ」が、西欧近代哲学の文脈の中では、精神やことと二元論的に対比されたものとして理解されやすいことからあえて、〈^る身〉という大和ことばを、彼の弁証法的な身体現象学の鍵概念として使用することを提案している。

このような身のあり方の多層性や多様性は、身が精神と二元論的に対立させられる、延長する実体としての身体あるいは物質なのではなく、何との関係にあるかによってその都度そのあり方が多様に変化してくる存在であることを示している。したがって同じ一つの身は、屍体に対しては生き身を、他者に対しては自己を、汝に対しては我を、社会的状況に対しては自己のあり方や分限を、敵に対しては身方（味方）を、単なる知的理解に対しては身にしみた、あるいは身についたより切実で生活に即した理解を、単なる役割遂行や表面的な行為に対しては身をもって示す、時には生命をかけ、全身全霊が動員されて行われるトータルな実存的行為を意味することになる。このように、身はその時々に関係するものやこととの差異や対立によって実¹⁴⁾に多様なあり方を生起させるのである。

つまり、身は固定した一つの実体的統合ではなく他者や他のものやことがらとの関わりにおいてある関係的な統合であり、関係の多様性に応じて多重性をもつ。それは実体のように固定的スタティックな統合ではなくて、たえず統合がやりなおされつつ生きられていく危ういダイナミックな変化に富む統合¹⁵⁾なのである。

このように記述された市川の身の概念は、筆者が先に述べた「生きた身体をもって世界の中で他者と関わる生きられた体験の主体」としての人間、あるいは「身体も認識のはたらきも、すべてその構造的な契機として内に含んでいるような……諸契機の弁証法的統一という構造をもっている……体験的全体としての我（体験我¹⁶⁾）」の概念と同一の事態を指していると考えられる。

本稿の叙述区分との対応でいえば、I. 科学以外的生活世界あるいは、非歴史的、普遍的、形式的、不変的な人間存在の生きられた体験の基本構造、で取り扱われる、A. 主体のあり方、B. 「わかる」及び分類体系、C. 時間体験、意識体験、D. 空間体験、知覚、身体、自然、E. 自己体験・他者体験の記述のほぼ全体と市川浩が〈身〉の構造という概念で展開しようとしていることが問題の射程として重なり合うものとなっている。論述を進めていく上で〈身〉ということばが使われる場合は市川の理論的射程を尊重して、本稿で用いている「生きた身体をもって世界の中で他者と関わる生きられた体験の主体としての人間存在」と同じものが意味される。市川の〈身〉の概念は心身合一において生きる全体としての「人間存在そのもの」を指しているからである。「身体」ということばを使う場合には、より限定された、関係存在としての人間が世界や他者と関わる場合、生きられた体験の主体が常に自らの統一の弁証法的契機としてそこにともなっている身体という意味で用いることにしたい。

ii) 錯綜体としての身：身の統合

市川は〈身〉を関係存在として規定すると共に、身を「錯綜体」として把握し、身の統合について論じているが、「錯綜体」として身を把握するに至るまでには以下のような経過があった。

「錯綜体」としての身体、という概念は、市川が〈身〉という包括的な概念を展開する以前の著書『精神としての身体』の第一章、現象としての身体、の中の、一、主体としての身体（主観身体）、二、客体としての身体（対象身体）、三、私にとっての私の対他身体、四、他者の身体、に続いて、五、錯綜体としての身体、という節で最初に取り扱われている。

この概念はまず Valéry, P. が「身体に関する素朴な考察」の中で提示し、彼が第四の身体とよんだものとの関係で紹介されている。Valéry は市川の記述における主観身体にあたるものを第一の身体、対他身体および私の対象身体を第二の身体、科学的分析の対象となる身体を第三の身体、とよび、第四の身体は彼が別のところで Implexe（錯綜体）と名づけたものに近いと市川は指摘する。それは Valéry によれば『われわれの各々にとって「現実の身体と呼んでも、あるいは想像上の身体と呼んでもさしつかえないような」¹⁸⁾ もう一つの身体であり、この『身体は「認識不可能であって、それを認識すれば、これらの問題〔身体という主題が喚起した難問〕は、すべて一挙に解決されるであろう。というのもそれらの問題は、この認識不可能な対象をふくんでいるからである。』¹⁹⁾ 『この身体は、現にはたらいっている現実的統合体としての身体をはなれてあるものではないが、またそれにつけるものでもない。それは現実化されていない潜在的な統合可能性をふくむ〈遍統合体〉ともいうべき身体であり……私が「歩く」という動詞を活用させるとき（私は歩く、私は歩いた、私は歩いていた、私は歩くだろう……）、その錯綜体の変動の片鱗がわれわれに察せられるようなものである。したがってソシュールの言語学の用語を転用すれば、はたらきとしての身体のあらゆる可能な統合関係 rapport syntagmatique と連合関係 rapport associatif の総体ともいうべきものである。』²⁰⁾

錯綜体としての身体、についての説明は『精神としての身体』においては十分に展開されずにいたが、市川のそれに続く論文「〈身〉の構造」²¹⁾ および著書『〈身〉の構造——身体論を超えて——』²²⁾ においてより広範な視野のもとに彼の〈身〉の構造論の中心的な概念として「錯綜体としての身」が位置づけ直されている。上記二つの業績において市川は「身体」というより狭い、西欧哲学の心身二元論の文脈での用法を思い出させることばを廃し、人間の生きられた体験の全体性をより適切に表現しうる大和ことばの〈身〉という概念を専ら使用するようになる。

彼が錯綜体という Valéry に由来する概念を〈身〉ということばの多義性と多様性の分析の後により明確な形でとらえ直すに至ったのは、身、自然言語、自然都市、社会組織などのリビング・システムの構造が、樹状図式（ツリー）に還元されるような人工的なシステム（機械、人工言語、人工都市、合理的組織）などに対比して、より高度の錯綜性の構造を共通に持っているという洞察をテコにしてである。

市川は〈身〉ということばのさまざまな用法の整理を行う際、それをどのような順序で排列すればよいかという難問にぶつかり、結局は「自然的存在の身のレベルから心のレベルへとぼって行って、最後に全体存在へという一種のハイアラーキー型の成層統合としてさしあたり身を」記述した。「じっさい、われわれの身のはたらきには、ハイアラーキー型の統合という面があり」人間存在の層位論的把握はアリストテレス以来西欧の思考伝統においても理解しやすい。「しかしそれだけでなく、身の特徴は、そういうハイアラーキー性を破るような統合形式をもつという点にあり……つまり斜行的あるいは飛躍的に下のレベルと上のレベルが関係を結ぶ非ハイアラーキー型の統合形式をもっている。しかもそれは身のシステムだけではなく、われわれがかかわって生きているリビング・システム一般の特徴ではないか。」²³⁾と述べている。

以上のような洞察をふまえて市川は、リビング・システムの錯綜性を、建築環境デザイナー Alexander, C. や Deleuz, G. と Guattari, F. などの論考を参照しつつ、ツリー、セミ・ラティス、²⁴⁾ リゾーム、さらに星雲状複合体（ネピュラス・コンプレックス）²⁵⁾ などの類型に分けて考察している。したがって錯綜体としての身の構造の特徴は、他のリビング・システム（自然言語、自然都市、社会組織さらに芸術作品も含む）の特徴を理解したり、身とそれらとの関係のあり方を理解したりする上で、非常に有効な手がかりとなる。これらのモデルはこれまでの科学主義的な社会学が取り扱うべき対象でありながら、その硬直したハイアラーキー的思考様式や分類の仕方、理論構成のモデルにさまたげられて、充分にその生きられた現実をとらえ切れていなかったリビング・システムの諸現象をよりよくとらえるための枠組として用いるものである。

もちろんこれらのモデルも、モデルである以上それ自体人工的な構成物にとどまる。しかしこのような柔軟なモデル構成のし方は、現象学的な志向をもった哲学者である市川が「仲だちされた経験による解明」²⁶⁾とよぶ手続の実例をよく示している。それは、哲学以外の諸科学での探求の成果を、自らの哲学的営為の中に取り込むことによって、身の現象主義的還元や科学主義的還元が陥りがちな単純化をさけつつ、リビング・システムとしての身の生きられた直接経験との参照を確保していこうとする複眼的で多元的な解明のし方である。

市川は錯綜体としての身を、「われわれの身の統合というものは、今、現実化している統合だけではなく、さまざまな統合可能性があり、そのなかの一つの統合が選ばれてくる。一つの現実的統合の背後にもいわば無数の可能的潜在的統合があり、われわれの身体はこうしたさまざまな統合可能性を含んでいるわけだが、こうした潜在的な統合可能性を含めた身体を錯綜体とよぶ。」²⁷⁾と定義している。

このような弁証法的でダイナミックな錯綜体のとらえ方は、社会を考える場合の Maus, M. の *phenomene social total* (全体的社会現象)²⁸⁾ の概念や、それをより詳細に展開した、Gurvitch, G. の深さの社会学の試みを想起させる。また筆者が「弁証法的な身体現象学」の立場に立

「わかる」ということの多層性について（Ⅱ）

って探究しつつある、多元的リアリティの問題や、本稿で取り扱っている、「わかる」ということの多層性の問題への探究が、常に「人間の経験可能性の開かれた全体」³⁰⁾を視野の中に取り入れようとしている努力と通底することを指摘しておきたい。

Schutz は自然的態度で生きる日常的な生活世界の空間構造³¹⁾に関して、ゼロ点としての身体を中心に、①現実的に到達可能な範囲 (actual reach) あるいは操作可能範囲 (zone of operation) と、②潜在的に到達可能な範囲 (potential reach) を区分し、さらに後者を、②-1. 過去に到達したことがあるがゆえに今後回復可能な到達範囲 (restorable reach) と、②-2. 未だ一度も到達したことはないが未来において達成可能な到達範囲 (attainable reach) を区分している。時間的構造との対応でいえば①は現在、②-1 は過去、②-2 は未来に関係している。このような Schutz の空間論は身体を中心として時間的視野にも注意をはらっており市川の身の構造論と対応を見出すことができる。

錯綜体としての身という市川の内容は以下のように説明することができよう。

現在実現している身の統合（例えば、私は今机に向かって論文を書いている）は、それだけに注目すれば単純に一つの行動が図化されている状態として理解されがちである。しかし目下実現している身の統合の背後には、過去に実現されたりされなかったりした無数の身の統合（私が初めて論文を書いた20年前のこと、今書いている同じテーマで書こうとして遂に途中で放り出してしまった7年前の原稿、今書いている論文のために一カ月間の旅行の間に書きためておいて、今机の上に拵げられているメモの数々など）があり、それらの多くは忘れ去られて直ちに自覚されたり想起されたりしないにしても、それらすべての過去の私の統合は、現在私になしつつある身の統合の前提となっており、現在の行動を支えている。また現在進行している身の統合のあり方は、未だ実現していない未来の可能な統合に対して無関係なのではなく、ある場合には次に可能な統合の前段階をなしたり、（過去数年間書いてきた数編の論文と今書いているこの論文を統合して、来年は一冊の本としてまとめるなど）あるいは、次に起るかも知れない別の可能性の起爆剤の役割を果たすことになったり（概念的な人間の探究の限界を思い知って、出家して宗教的なリアリティの探究へと飛躍する。あるいは、研究者としての生活の不毛さに見切りをつけてより切実な実践者の道を選ぶなど）あるいは過去の身の統合が現在の統合を飛び越えて実現するような別の可能的統合のキッカケとなったり（ひとたびは絵かきになるとデッサンに通っていた、今論文を書きながら、錯綜体としての芸術作品の論述に至るや、突如、絵が描きたくなり、ペンをなげうってキャンバスに向かうなど）するのである。

このように錯綜体としての身の統合は、生活史の中でもその都度実現されたりされなかったりした無数の潜在的統合や可能的統合と意識下的にも関わりあいつつ、現在の一つの統合が実現されているものと見なすことができる。

市川は錯綜体としての身の統合を、統合のレベルの観点から、向性的統合、志向的統合、

仲だちされた統合の三つに区分し、さらにそれらの統合が現実化しているか可能的であるかによって、現実的統合と潜在的統合に区分する。³²⁾

向性的統合とは、³³⁾反射のような非意識レベルのはたらき、また意識化しうが当面は意識の焦点にのぼっていない前意識的な分節化のはたらき、あるいはさまざまに変形された形で意識レベルに影響を与える抑圧された無意識的なものはたらきなど、意識されないレベルでの統合である。筆者が別稿で言及した……しながら……する、というながら行動は、前者を地、後者を図として位置づければ、意識の焦点にのぼってくる……するという図に対して、無意識的にあるいは意識下の習慣化して行われる……しながら、という地は、ここで市川の述べている向性的統合の具体例の一つと考えることができる。さらにそれを詳細に見れば、ながら行動は、一つの地の上に一つの図が成立しているという単純な構造ではなく、発達や学習過程の時間的要因をも含めて考えると、多くの区分しうる図と地の系列を含んだ錯図構造をなしていることが明らかとなる。

志向的統合は³⁵⁾意識的レベルの統合である。身は世界との関わりにおいてあるが、同時に世界に関わっている身自身にもかかわる。つまり身は、世界に関係すると同時に、身が身に関係するという関係の二重性を通して次第に意識レベルを高めていく。その原初的な形態はさわる手とさわられる手の二重感覚の現象である。このような二重化は意識のごく原初的な可能性であり、同じことは動物にも見出せるが、人間の独自性はその可能性を次の仲だちされた統合、ことに言語を介する統合によって現実化する点にある。市川は志向的統合を自己作用的志向としての、気分、情動、感情と、外部作用的志向としての、知覚と行動に区別して説明を行なっている。

仲だちされた統合は、³⁶⁾道具とか機械を含めた意味での用具と、言語その他の記号、また個人の集合によって形成されながら個人にとっては外在的に存在している制度、などによって媒介された身の統合である。〈仲だち〉によって人間がかかわる世界は内面的にも外面的にも拡大される。それは人間の、ここいまの状況への内属から人間を解放し自由にする超越の原理であると共に、逆に仲だちする道具や機械や言語や制度に組み込まれ、それらに隷属するに至る疎外の原理でもある。

向性的統合、志向的統合、仲だちされた統合は錯綜体としての身の統合の三つのレベルであり、層位的ハイアラーキカルに整理されているが、それらの各々は単独では存続しえず全体としての身の統合を構成する弁証法的な契機をなしている。

一人の哲学者が机に向って思考しつつ、思考内容をノートに書きつけるといった場合、専ら彼の意識の焦点にあるのは哲学的思考内容であろうが、机に向って正しく坐り、姿勢を保つ向性的統合は意識されないがちゃんとそこで機能している。またまとまりにくい考えをことばに定着させ、それを文字としてノートに書きとめる作業には、言語や文字、ペンやノートを使い

「わかる」ということの多層性について (II)

こなすといった仲だちされた統合が参与している。これら三つの統合のレベルは下位のものが上位を支え、上位のものが下位のものを一方向的にコントロールするという単純な決定被決定の関係では理解できない。だらけた姿勢や乱雑な机上、手と合わないペンやスムーズにペンが流れないノートなどは哲学的思考＝志向的統合を時としてさまたげたり不可能にしたりする。

明窓浄机に姿勢を正して坐し、書物をきちんと重ね、筆紙を選び、……といったことが思索を支える重要な前提として重んぜられるのは、志向的統合が向性的統合や仲だちされた統合によって規定されることが広く知られているからである。

また日本文化の特徴である諸々の芸道が、型の反復稽古から入って、型を破る創造的芸域に達する修業法をとるのも、多くの宗教が儀礼を重んじて、一定の身体の用い方（身体技法）や一定の祭具や教文を用いることによって、日常的世俗的リアリティから超越して聖なる宗教的リアリティを相互主観的に実現しようとするのも、向性的統合、志向的構造、仲だちされた統合のそれぞれを機能させつつ、芸道の実践や宗教儀礼という一つの錯綜体としての身の統合を作り出そうとする努力の現われであると考えられる。³⁷⁾

iii) 身分け：身による世界の分節と世界による身の分節

「身分けは、身によって世界が分節化されると同時に、世界によって身自身が分節化されるという両義的、共起的な事態を意味する。³⁸⁾」関係存在としての人間が世界や他者と関わる時、人間は自己を組織化しつつ世界と関わる存在であるから、発生論的には、自他未分化の共生的中心化から出発し、脱中心化、関係化を経てより高次の再中心化を達成していく。この中心化——脱中心化——再中心化³⁹⁾というサイクルは一度限りで終結するのではなく生活史のそれぞれの段階で成熟の程度や関係化の拡大や深化に応じて形を変えながら何度もくりかえされる過程である。またそれは常に成功裏に経過するとは限らず時には、自閉的中心化（自閉、分裂）や疎隔された脱中心化（虚無）や中心化の弱い関係化の過剰（躁的狂気）などの病理を生み出すこともある。これらのサイクルのそれぞれの段階で世界は身によって分節されると同時に、身は世界との関わりを通じて自らのうちに分節をひきうける。

市川が「身分け」とよんだことがらは、本稿の基本的視点となっている、人間の基礎的体験構造における連続と分節の区分のうちの分節の概念に相当する。人間が、あるいは市川の身が、世界の中で他者と共に生きるプロセスは、身が世界を分節すると同時に世界によって身が分節されるという、相互規定的、両義的で共犯的な過程である。身あるいは人間主体を離れて、それ自体として成立しているような実体としての分節は世界にはない。⁴⁰⁾時間や空間のような基本的枠組すら、人間主体を離れては成立しえないし、主体のあり方が変われば、そこで措定される時間や空間の枠組も変化する。世界の身による身わけ、分節のし方が異ってくるからである。

それでは、人間あるいは身による分節が行われる以前の連続の体験とは何か。⁴¹⁾前稿では Husserl, Schutz, Litt, 蔵内等の現象学的な体験分析をふまえて、時間体験に関しては、生きる

れた時間、前現象的前述語的時間、Bergson の純粹持続としての時間体験を連続の体験としてあげて、分節された時間体験である、反省された時間、現象的述語的時間、空間化された時間と対比した。空間体験に関しては、それを知覚体験、身体体験、自然体験に区分してそれぞれにおける連続と分節を考えようと試みた。知覚においては、図地未分化の知覚体験（連続）と、図地分節の知覚体験（分節）として対比し、それぞれの知覚を個別に検討した。ここまでが前稿である。

身体体験における連続と分節に関しては、前稿第 2 図⁴²⁾では、市川の『精神としての身体』の中で取り扱われた「主体としての身体」を連続の体験に、「客体としての身体」を分節の体験に配当している。そのような対比を行なった理由は、市川が「主体としての身体」の記述において、身体の限界の可変性について論じており、道具の仲だちによって生成する媒介された身体空間や他者との関係において生成する対地的な身体空間においては「身体のひろがりはいしばしば対象化されて身体の限界をこえてそのかなたへとびる。」としており、「客体としての身体」に関しては、それが科学があつかうような意味での客観的身体ではなく、具体的生の中にあられる限りでの私の対象身体であり、その特徴は、第一に、われわれに外面を与え、われわれを個体としてとどし、他の身体や物体からわれわれを分離すること、第二に、私の対象身体は身体に外面性を与えることによって私と身体とを分離する⁴³⁾としているからである。前者を連続の体験、後者を分節の体験に配当することが当を得たものであるか否かは、未だ筆者自身確信が持てない。

ただ、市川が〈身〉という概念を従来の身体論の枠組を超えて、生きて世界や他者と関わるトータルな関係存在としての人間そのものに対して用いるに至った段階では、彼の言う身分け、あるいは身による世界の分節は、第 2 図の I—C, I—D, I—E で筆者が取り扱った全体に及ぶ原理的な身の構造の一つであることになり、筆者のそれらを区分して一つ一つについて連続と分節を考察するという企図と個別的な対応がつけにくいことになっている。

筆者は、市川の〈身〉の構造論の企図を、人間存在の全体の重要な部分あるいは構成要素として身体を論ずる従来の「身体論」を超える試みである点、特にその錯綜体としての身＝人間存在という包括的なとらえ方を、評価するものである。しかし筆者の関心からすると、市川が身分けについて論じている論旨に同意すればするほど、身分けあるいは身による世界の分節の以前あるいはその前提としての連続の体験についてほとんど論じていない点に物足りなさを感じる。

発生論的には未分化（連続）から分化あるいは分節が生ずることを説明するのはたやすいし、現に市川も中心化と脱中心化、向性的統合、志向的統合、仲だちされた結合などの鍵概念をもとにして、分節について論じている。しかしその場合、連続＝未分化＝発生以前あるいはその直後という時系列的発生論的位置づけしか、連続の体験については与えようがない。

筆者が構想するのは、個体発生であれ系統発生であれ、発生論的な原始あるいは原初における連続体験だけではなく、二つの発生論から言えば、分化や分節の極に想定されるような新たな連続体験であるかあるいは、発生のそれぞれの段階で構造的に、自覚されにくい形であれ機能している連続の体験の自覚化についての論考である。

このような想定は経験科学としての社会学の枠を超えることになるかも知れない。しかし、Jaspers の広義の Wissenschaft の定義である、「合理的な道をたどりつつ概念によって到達すべきあらゆる明晰さの体系」⁴⁴⁾の枠内においても、少くとも以下のような問は、問うに値するだろう。

「錯綜体としての身が、世界を身分けし、同時に世界によって身分けされる、その身分けや分節以前の連続の体験とはどういうものか。」あるいは、「自己をも含めて世界を図化するあらゆる図化の前提には、それらの普遍的地としての私の身体があるし、さらにその私の身体という図を支える前提には普遍的な地平としての世界があるのだが、このようなあらゆる錯図構造の成立する原地、あるいはあらゆる地の地とは一体何であるのか、如何にしてそれが認識できるのか。あるいはもしそれを概念的に認識するのが不可能ならば如何にそれを体験できるか。」

三段論法に見られるような形式論理学の合理的推論と対比して市川は、癒合的同一化の形式を主語的同一化と述語的同一化⁴⁶⁾に区分して、筆者が Universal Projection とよんでいる世界体験の様式を推論形式の側面から明らかにしている。

癒合的同一化の推論形式は、合理的科学的思考形式からすると、非合理的で幼稚な、原始的な、幼児や未開人の思考形式として貶められるものである。しかしそれは、宗教や神話、芸術や夢や空想、民話や詩、日常用いられるメターファー等の中に随所に見出されるものであり、錯綜体としての身の構造がハイアラーキー的に統合されるばかりでなく、時には非ハイアラーキー的、斜行的飛躍的な統合を実現することと対応した構造をもっている。

主語的同一化の論理は、⁴⁷⁾主語の同一性にもとづいて述語の同一性を推論する思考様式であり、市川があげている例では『マクベス』の冒頭で三人の魔女が歌う、Fair is Foul. Foul is Fair. という歌がそれにあたる。「いいは悪いで、悪いはいい」というこの歌の推論形式を分析すると「 x はいい。しかるに x は悪い。ゆえにいいは悪い。」ということになる。

述語的同一化の論理は、⁴⁸⁾述語の同一性にもとづいて主語の同一性を推論するという思考形式で、これは精神病理学的な妄想判断から日常的なメターファーに至るまで随所に見られるものである。聖母マリア妄想の場合では、「聖母マリアは処女である。しかるに私は処女である。ゆえに私は聖母マリアである。」という推論形式をとっており、日常的な例では、「タヌキは人をだます。あいつはだます。ゆえにあいつはタヌキである。」あるいは「女心と秋の空」というメターファーでは、「女心は変わりやすい。秋の空は変わりやすい。ゆえに女心は秋の空。」という述語の同一性にもとづいて主語の同一性を推論する形式になっている。

「このような述語的同一化においては第一に、ある主語の述語というものは無数にあるから、どれが共通の述語として選ばれるかは予言不可能であり、第二に、選ばれる基準はきわめて個人的でありうるから、しばしば理解不可能であるということが起こりやすい。そこに述語的同一化が非論理的であり、狂人の論理とされる理由がある。しかし逆にポジティブな側面を考えると、われわれがまったく情性的に固定している日常的な分節化や形態化、あるいは既成のものの考え方や世界の見方をひとまずバラバラに解体し、予想外の類比的癒合の可能性を開く。そういう点で新しい発見とか新しいアイディアとか新しい表現への道を開くという側面がある。⁴⁹⁾」

市川は述語的同一化の推論形式が共通感覚と結びついて、ある種のメターファーが社会的に共有され日常化されると陳腐で月並なものになるので、詩人が一般の人々の理解可能性の範囲の周辺で新鮮なメターファーを作り出したとき、人々に強い印象を喚起することができる⁵⁰⁾と述べている。

市川があげている述語的同一化の例で、先に筆者があげた問と関連しうると思われるのは次のような禅問答である。『無門関』の第22則に「いかなるか是れ仏」という僧の問に対して「乾^{かん}屎^し糞^{げん}（くそかきべら）」と答える場面がある。この場合、「仏は x である、糞かきべらは x である。ゆえに仏は糞かきべらである。」という推論形式が行われていることになる。市川は『つまり禅問答では「分別的論理で答えることのできない問い」をだし、また「分別的問いを破壊する答え」をだすことによって、分別的理解そのものの不可能性の前に人をたたせる点におそらく意味があると思う』と述べている。

筆者の先の問い「あらゆる地の地、原地とはいかなるものか、いかにそれが認識できるか、体験できるか。」という問に対して、学者からは、それは学問の範囲を超える問だという答えが、禅者からは「只管打坐」という答えが返ってきそうな気がする。

錯綜体としての身による世界の分節と世界による身の分節ということの射程は、現実的統合のみならず、潜在的あるいは可能的統合をも含むものであり、それは筆者の「人間存在の経験可能性の開かれた全体」の射程と重なり合うものである。したがって狂気や芸術や宗教的経験は、科学と同じ資格で、当然その射程に入りうることになる。しかし「わかる」ということのも多層性を考えていく場合には、分節の前提となる、あるいは分節の後に達成される連続の体験が問題化されねばならないというのが筆者の根本的な問題意識である。

vi) 身の内と外：仲だちされた身の拡張

市川は「主体としての身体」の限界の可変性を以下の三個に区分し、次のような説明を与えている。⁵¹⁾

① ほとんど体表と重なる最も安定した生得的身体的空間。例えば眼の前にものが飛んできたとき反射的に目を閉じる境界は必ずしも皮膚の表面と一致しない、はたらきとしての生得的身体空間を示している。

② 体表をこえて拡がる比較的安定した準固定空間。1) 道具の仲だちによって生成する媒介された身体空間。この場合道具は自己の身体の動きの中にとり入れられ、習慣化され、自己の動きの中に統合される。盲人の杖、外科医のゾンデ、テニスプレーヤーのラケット、タイプストのタイプ、ドライバーの車などにその具体例が見出される。2) 他者との関係において生成する対他的な身体空間。Hall の例示する、密接距離、個体距離、社会距離、公衆距離の区分と、それぞれの社会関係の意味の相違や、会議や食事や授業のときに坐る座席や、いま前にしているテーブルの一面が、なわばりとして自己に所属させられることや、授業の時に学生が取る教壇との一定の距離などがその例である。

③ ひろがりたえず流動する不確定な可変的身体空間。はたらきとしての身体と対象との関わりは、単なる一方的刺激の受動ではなく、身体の能動的かつ対話的な対象把握と切り離しては考えられない。たとえばドライバーとしての身体は対象のカーブにまで拡がりつつ、身体的な対象の素描と応答がもたらす緊張の中で対象を把握しているのである。あるいは、ボクシングの試合を見ている観客が、最初は応援している選手の動きに同一化している同型的同調⁵²⁾を示しているが、より熱中してくると、相手の動きに対してあたかも自分が選手であるかのような、応答的同調を示すようになる。

身体が皮膚の限界を超えて拡張される現象を、記号や言語、象徴による、ここ今、からの超越の諸次元として、Schutz は、Mark, Indication, Sign, Symbol の四つの次元に区分して論じている。言語や記号や象徴による仲だちされた身体の拡張は、人間と動物を区分する指標となるものであるし、道具や機械、社会制度などの仲だちの基礎となる重要な意義をもっている。このことについては別稿で詳論したのでここではそれを指摘するに止める。⁵³⁾

道具や機械の仲だちによる身体の拡張は、その社会の技術の発展段階によって区分できるし、それらの用具を用いる身体技法の変化や、それらの用具を用いてなされる生活が作り出す思考様式、知覚様式、さらに価値観にまで影響をもたらす。⁵⁴⁾

ここではそれを以下のように区分したい。

① 直接一人の人間の身体エネルギーによって操作される道具の段階。いわゆる手仕事で用いられる道具、職人仕事の世界。⁵⁵⁾この段階では人間の身体と道具とそれを取り扱う対象が身近な距離にあり、いわば身体化した道具を媒介とした対象との対話とでもいえる関係がそこには生ずる。その洗練の度合や技術の程度が大きく異なっても、直接職人の手と体の動きが対象に働きかけて一つ一つ作り出された物には、共通の人間の特徴と美が見られる。柳宗悦の民芸美学が普遍性をもちうるのは、道具を生ま身の人間の手と体が用いて素材に働きかけて物⁵⁶⁾が作り出される、その過程と結果に、ある普遍性が存在するからである。

② 一人の人間以外の自然力(風、水、家畜、他の多くの人間)のエネルギーの媒介によって操作される初歩的機械の段階。この段階と①の段階は多くの場合共存して、伝統的な生活様

式を成立させる。操作される機械はまだ直接的な人間の身体の力や感覚によって制御される範囲にあり、操作する人間の身体と操作される機械とその働きのプロセスと、それによって産み出される産物との関係は、直接全体を見通し得るものである。①と②の組み合わせによる技術段階は人類史の長い期間を支配し特徴づけてきたし、現在においても発展途上国の農村部の多くは、実際に底辺の農民が用うる技術手段としてはこの段階に止まっている。この段階においても、ピラミッドや万里の長城のような巨大建造物が作り出されたが、それが可能となったのは、巨大な数の人間の身体の支配と組織化によっている。

③ 人工的に設定された内外燃焼機関の作り出すエネルギーによって動かされる近代的機械の段階。1974年ワットが蒸気機関を発明して以来、ガソリンエンジン、電気モーター、ジェットエンジン、核エネルギー等々の熱機関が次々に発明され、その機能と能力は加速的に高められ、近代的工業生産を生み出した。人間と機械との関わり、人間の労働とその労働によって生産された商品との関わり、その商品を用いる消費者と物の関わり、人間と人間の関わり、人間と自然との関わりが、これによって著しい変化をこうむることになった。その中で人間の身体は、Faucault⁵⁷⁾ のいうように、近代的な生産様式に適合するように、工場、軍隊、病院、学校、監獄等の近代的制度を通じて組織的な規律訓練を与えられすみずみまで支配され管理されるものとなった。

④ 熱機関のエネルギーの操作と制御が、エレクトロニクスの技術によって媒介されている、高度の情報処理能力を内蔵したハイテクノロジーの機械（ロボットなど）の段階⁵⁸⁾。これは目下我々が経験しつつある段階であり、その著しい特徴は人間の身体と物や自然との直接的な関わりの必要の極小化ということである。エヤコンのきいた、あらゆるメディアのハイテクノロジーで装備された都市や家屋の住人は、あたかも快適さを保証するカプセルにつつまれて生活しているようなものであり、自然と人間の身体との直接的な接触は、生活の必要からではなくレジャーとして求められるにすぎないものとなる。生き物としての人間とその身体は、あらゆる人工的な媒介物によって、関係の直接性をうばわれ、一見ますます便利に自由になっているように見えて、実は見えない人工的な媒介者によってますますすみずみまで管理されるようになっていく。

このことは、現在のような生活環境しか経験したことのない子供たちに最も顕著に現われつつあるように思われる。⁵⁹⁾ Illich の批判する⁶⁰⁾ ように近代的な学校制度は子供から本当に自発的に学習する能力をうばい、近代的な病院や医療制度は人間から、自ら治癒し健康を維持する能力をうばい、近代的な交通システムの発達は、無駄で過剰な人と物の動きを人間に強いる結果になっているのかも知れないのである。この問題の切実さは、南北問題を視点にして地球規模の⁶¹⁾ 広がり⁶¹⁾ でエネルギーや食糧や人口の問題を考えるとはっきりしてくる。

高度な機械の仲だちを媒介にして営まれ、計器やコンピュータの数字をよみとることによっ

て操作される生産活動や生活は、直接的な自然や物との身体的な接触がもたらす実感と二次的な記号経験との間のギャップをますます大きなものにしていく傾向をもつ。それと共に、高度で巨大な仲だちされた機械を操作する人間は、機械を操作すると同時にそれによって操作されるに至るといふ弁証法を身に引き受けねばならない。身は世界を分節すると同時に世界によって分節されるからである。

コンピュータやゲーム機の二次的な記号情報と楽しく遊びたわむれる子供たちを見ると、新しい感覚をもった新人類が生じつつあるという感概にとられることもあるが、彼らのトータルな身がそれによってどのような分節をこうむることになるのか、新しい記号感覚、情報感覚が獲得される反面、それはどのような感覚の喪失を生じさせることになるかが問題である。なぜなら一方における獲得は他方における喪失を伴うことは、前稿において、Universal Projection⁶²⁾の喪失と合理性の獲得⁶²⁾に関して述べたように、人類の進化の普通法則かも知れないからである。一方における獲得が他方における貴重なものの喪失とはならないようなあり方が構想されねばなるまい。

v) 身の統合の社会文化的次元(身体技法)：身は文化によって形成されつつ文化を形成する。

われわれは一人で世界と関わっているのではなく「すでに歴史的・社会的に分節化されてきた自然存在や社会存在のうちに生まれ、世界によって分節化されつつ、自分独自の分節化を世界の中に織り込んでゆく⁶³⁾。」錯綜体としての身の現実的な、また可能的な統合は真空の中で行われるわけではなく、すでに社会的文化的に形成され分節された世界の中で他者との関わりの中でそれぞれの生活史を通して行われるのである。

他者と共に生きる共同世界の中で行われる身の統合には、他者と共通する図式がある。他者と共通する身の統合の図式には、人類共通のものもあるし、各々の文化に固有であるような、身ぶりとか表情のような、文化的間身体図式というべきものもある。錯綜体としての個々の身は、生理的かつ文化的な間身体図式の中で形成され、またそれは個々の身の新しい行動がたえず共有されることによって新たに作り出されていく。「身は文化によって形成されつつ文化を形成する⁶⁴⁾」のである。

Mauss は「ひとびとが伝統的なし方で身体を用いる方法⁶⁵⁾」と身体技法を定義した。しかし、身体技法は常に伝統の産物であるに止まらず、過去にはなかった新しい身体技法が生み出され、それが人々に共有され定着していくというプロセスも考えなければならない。Faucault が描き出した、近代社会が人々に課した身体⁶⁶⁾の規律訓練は、まさに伝統社会には見出されなかった新しい身体の用い方であったからである。

既存の行動様式を打破する新しい行動様式や思考様式(近代社会はまさにそれを人々に要求したのだが)を人々の間に定着させるためには、新しい身体技法、新しい身の統合のあり方を

実現させることが必要となる。それは身体の新しいふるまいやしぐさから、新しいファッションや道具や持ち物、新しい家屋や部屋の構造、新しい居住環境や都市、新しい食物や飲料、新しい自然や他者との関わり、新しい神との関わり、新しい宇宙観にまで及ぶ。なぜならそれらのすべてが身の統合に関わっているからである。

身体技法という観点は Mauss 以来、文化人類学や民族学の個別研究を鼓舞する重要な鍵概念となりつつあるが、社会学の領域ではほとんど顧慮されていない。それはこれまでの社会学があまりにも意識化された意味にのみ関心を向ける社会学でありすぎたからであり、身体には二次的にしか関心を払ってこなかったからである。

市川は、間身体図式には人類共通のものもあるし、文化に固有なものもあると述べている。人類共通の間身体図式に関しては、Hall のプロクセミックの研究や動物行動学者たちの研究、動物行動学の視点からの人間の行動の研究、Tinbergen の自閉症の研究や Rolenz の攻撃性の研究、Eibl-Eibesfeldt の人間の通文化的な表現様式の研究などがあるし、文化に固有な身体技法に関しては文化人類学者や民族学者たちの個別研究が積み重ねられているし、最近では映像人類学が人間の体の動きそのものを人類学的視点から記録し分析しつつある。Annal 派の社会史的研究の中にも豊富な事例研究がある。体育や演劇の理論と実践からの野口三千三や竹内敏晴の注目すべき業績もあり、建築学からの身体への考察や研究もある。哲学の領域では Merleau Ponty, Marcel, Waldenfels, Foucault, 市川浩などの研究がある。⁶⁷⁾

しかし社会学プロパーの研究者たちの、身体の問題に対する理論的実証的取り組みは、問題の重要性に比して余りに乏しいものである。筆者は目下のところ上述の社会学外の業績から学びつつ、社会的に身体の問題を取り扱う理論的枠組を模索している状況であり、それを Schutz の多元的リアリティ論、知識論、象徴論、生活世界論、科学方法論などを手がかりとしつつ、これまで充分展開されてこなかった、弁証法的な身体現象学にもとづく社会的な身体論の形成へと歩みを進めているところである。⁶⁸⁾

(3) 生きられた世界体験における連続と分節

前稿で Universal Projection の概念について説明を行なったが、それは筆者の区分からすれば、生きられた世界体験における連続の体験にあたる。

しかし、Universal Projection という表現は未だ充分熟したものとなっているとはいえない。それは前述したように、Levi-Bruhl, Levi-Strauss, Tylor, Gehlen, Tenbuch, Wundt, Werner, Scheler などが、それぞれの文脈で研究した未開社会の原始心性や神話や宗教観念あるいは論理に対する、それぞれ異なったネーミングに対して Luckmann がそれらを一括する概念として提出した概念である。⁶⁹⁾ 筆者は直ちにそれに「天地万物一体同根」や「一切衆生悉有仏性」という東洋哲学の伝統的観念をつけ加えて理解した。このことの当否は別に一個の論考を必要とするので、目下のところ仮説的概念に止まることを表明しておく。

しかし、そのように多様な論者が多様なネーミングであげた未開社会の原始心性や、東洋の哲学的洞察や、さらに幼児の世界認識の形式は、それを推論形式の類似性という観点から整理すると、市川が述べた癒合的同一化の論理あるいはその下位区分としての主語的同一化と述語的同一化の論理として統一的に理解可能なのである。そしてそれは、上記のものだけでなく、日常的なメタファーや詩の表現、未開宗教に限らず教祖宗教やあらゆる芸術形式、民話や寓話や夢や空想、精神病理現象等の中に、およそ近代科学の論理や形式論理学の推論形式をのぞいた、人間的な現象の中に普遍的に見出せるものなのである。

むしろ人類がその発生以来経験してきた基本的な世界体験の様式は、Universal Projectionあるいは癒合的同一化の様式であって、古代ギリシアに淵源をもちユダヤ・キリスト教的一神教の土壌で育ってきた、西欧近代科学の合理的理性や、それにもとづく社会や文化の形成は、人類史にとっては異種の鬼子かも知れないのである。しかもこの鬼子はたちまちのうちに世界の植民地化を果し、世界を一つの資本主義的経済圏にまきこみ、世界各地の伝統的で自生的な生産様式を破壊し、二度の世界戦争をまき起し、東西の対決を生んだ結果、世界の全人口を何度も殺しうるだけの核弾頭を生産し、地球規模の生態系を乱し、北の世界には民主的社会と莫大なエネルギーと資源の浪費の上に豊かな消費生活様式をつくりあげる一方、南の世界には、独裁政権とますます拡大する貧富の差と飢を生きだしてきたのである。

科学的思考もまた、それ独自の認知的様式をもった多元的リアリティの一つであり、可能な身の統合の一つの現実化の形態であることは否定できない。しかしその一つの現実、一つの身の統合のあり方が、他のあらゆる可能な人間的な現実や身の統合を、一つの原理ですみずみまで支配してしまうという事態が起りつつあるとしたら、それは全体としての人間の経験可能性の破壊を意味するだろう。ここで起りつつあることは、まさに一方での獲得は他方での喪失なのであり、そうならないためには、もう一度、人類史の全体と、その中で現実化されてきた人間の体験と、可能性にとどまった体験を、トータルに見直す視点が必要となるだろう。また、Husserl が1935~36年に提起した、科学以前の⁷⁰⁾あるいは科学以外的世界という問題が改めて21世紀に向う今日の視野からとらえ直されねばならないだろう。Universal Projection と近代科学の統合という課題は、1926年の宮沢賢治の「農民芸術概論綱要」⁷¹⁾の中に、人間にとって可能な身の統合のめざすべき目標として素描されてもいたのであるから。

Universal Projection の体験が、世界と関わる連続の体験様式であるとすると、身あるいは体験我にとっての分節の体験は、自己の身体を中心として生きられた生活的連関の中で分節された空間ということになるだろう。身体を中心とした生きられた空間の基本的分節は、上下、左右、前後、近遠、内外などであり、生活が営まれる地球という環境との関わりでは重力の方向に規定された、上下(天地)、日の出入りに規定された、東西南北、明暗(昼夜)、そこで生活が開かれる地表の分節としての山野沼湖河川海などが基本的な分節として、均質空間とし

てではなく、それぞれ主体にとって生活的な意味づけや価値づけをともなって分節される。

生きられた空間がどのように分節されているかについても、人類普遍の分節と、それぞれの文化に固有の分節とがあるだろう。両者の通文化的な異同については、認識人類学が最近業績を積み重ねつつある Folk Taxonomy の研究に具体的に示されている。

1-E 自己体験と他者体験における連続と分節

身分けの両義性は對他者関係においてもっとも鮮明に現われる。「他者を分節化することは、身を自己として分節化することであり、身を自己として分節化することは、他なるものを他者として分節化することに他ならない⁷³⁾」からである。したがって自己体験と他者体験は、一方が他方に先行したり、一方が他方を規定したりするような因果系列や序列関係ではなく、両義的共起的な弁証法的相互規定関係にある。叙述の順序として自己体験から出発して他者体験に及ぼうと、その逆に他者体験から出発しようと、それは一度にすべてを言いつくせず時系列的にしか事柄を論述できない言語の制約にすぎないのであって、叙述さるべき事柄自体としては、両者は共起的、相互規定的な事態なのである。

i) 発生的社会化：自他未分化の共生的な中心化——脱中心化・関係化——再中心化

自他未分化の共生的な中心化の段階は乳児期にみられるが、そこでは世界の分節化は原初的なものにとどまっている。出産による母親との分離をへて間のないこの段階においては、心理と生理は未分化であり、個々の感覚能力も充分分化していない。母親とは物理的に分化しているが、生理的心理的前人称の共生が生きられ、快—不快といった原初的な分節によって世界と関わっている。

発達が進むと生理と心理の分化、感覚や運動能力の分化などに対応して、世界が、ものとひと、自分と他者、意味するものと意味されるものなどの分節を引きおこす。未分化な共生的な中心化は発達と共に脱中心化⁷³⁾、関係化され、社会的ごっこ遊びが可能になる段階では、自己中心性を脱して想像上の他者へと脱中心化し、その役割を演じ、他者の身になって行動できるようになる。言語の習得による他者とのコミュニケーション（外語）は世界の分節を飛躍的に高め、子供が所属する言語共同体が相互主観的に分節している世界像を子供に与えるが、同時に内面化された対話である内語の発達は、子供に内面世界を与え、自己と対話するもう一つの自己という内面世界の分節を生み出す。

発生論的に一つのサイクルが完成するのはピアジェが形式的操作の段階によぶ思春期⁷⁴⁾であるが、それは自己の社会性を強く意識し他人を意識するようになると同時に孤独を強く感じ、自己の独自性を最も強調する時期でもある。この時期には「自己とは何か」が中心テーマとなり「社会とは、人生とは何か」が性急に問われる。形式的操作による抽象的可能的なものについての思考の発達は、ありうるものとしての理想我や理想社会と、現実我や現実社会の二重化をもたらし、人格は内面と外面、自己と社会、理想と現実といった多重的な葛藤のうちにおかれ

る。このように多重的なより高度の世界の分節化と、それへの取り組みを通じて再中心化が達成されたとき、社会の中での自己の Identity の確認が行われることになる。

自己組織化する存在としての身の統合の、中心化——脱中心化——再中心化という過程についての概念は形式的な概念であるから、発達の種類々の分野や、より微視的な過程にも巨視的な過程にも適用される。発達段階にそれぞれ配当して上述したようなプロセスは生活史のそれぞれの段階で何度も形を変えてくりかえされる。例えば第一の段階で問題となる分離不安⁷⁵⁾は、弟や妹の誕生、就学、成人式、就職、失恋、失業、死別、子供の結婚、停年、老い、自己の死といった人生の節となる画期には多かれ少なかれ出現し、世界とのかかわり方の変化や、それと相関的に自己組織化の逆行や斜行や解体をひき起しうるのである。

この自己体験と他者体験の共起的相互規定的発達過程に関しては、Piaget, Vigotzky, Walon, Erikson 等の発達心理学的研究や、Mead, G., Parsons, Berger 等の社会化理論、文化人類学者たちの文化とパーソナリティの理論などが詳細に取り扱っている。ただそれらの個別科学的研究の相互の共通性をよりよく定式化しているのは、Merleau-Ponty や市川浩の「弁証法的な身体現象学」の立場からの発達論、社会化論⁷⁶⁾のとらえ直しの試みである。

発生的社会化の文脈で、連続と分節の体験を区分するとすれば、前稿第 2 図に示したように、自他未分化、母子一体(連続)に対する自他分化、母子分離(分節)われ——なんじ、われ——その分離ということになる。

ii) 構造的社会化：我と汝の視界の相互性

ここでやっている発生的社会化と構造的社会化の区分は Schutz の知識の社会化についての区分を借用したものである。Schutz は知識の構造的社会化⁷⁷⁾に関して「視界の相互性の一般命題」を提示し、我と汝の出会いにおいて顕在化する二つの差異、(1)立場の相違による世界把握のちがいが(我は私のパースペクティブから汝を見ているし、汝は汝のパースペクティブから我を見ているから二つのパースペクティブは異なったものでしかない)、(2) 我と汝のレリバンスの体系の相違(我と汝はそれぞれ異なった生活史を生き、それぞれの生活史の中でそれぞれ異なったレリバンスの体系を発達させてきている)を克服する次の二つの理念化をあげた。(1)立場の相互置換可能性の理念化(我と汝は生きた身体をもつとも移動可能である以上、お互いに立場を置きかえることができ、立場を相互に置きかえれば我はかつて汝が見ていたパースペクティブを経験し、汝もかつて私の見ていたパースペクティブを経験することができる)と(2)レリバンスの一致の理念化(我と汝の生活史の差異から生じたレリバンスの体系の差異よりも、目下のここの状況の中で我と汝の間で共通な生活の必要は、両者のレリバンスの一致を強制してくる)がそれである。

しかし、この Schutz の「視界の相互性」の規定は、用語と内容のプリアリティからすれば⁷⁸⁾Litt が参照されるのが当然であるにもかかわらず、Litt については一言もこの文脈では言及さ

れていず、Cooly から着想をえたものとして注記⁷⁹⁾されている。それは Schutz が自らを Husserl の正統的な現象学の展開者（内容的にはずいぶん異なっているが）と位置づけていた立場からすれば、新カント派的背景をもつ Litt の現象学的体験分析は、正当な現象学的業績として認め難⁸⁰⁾かったからであると思われる。

Litt, 蔵内の「視界の相互性」の理論の学習から出発した筆者の立場からすれば Schutz のこのような扱いはフェアでないし、Litt, 蔵内の「視界の相互性」による社会関係の本質規定の方が、生きられた体験の現象学的分析としては深みがあると考えている。

Litt, 蔵内の、我と汝の視界の相互性の体験分析については別稿⁸¹⁾で詳述したので、ここでは上記のことを指摘するにとどめる。

構造的な社会化における連続と分節の体験に関しては、我と汝の「視界の相互性」の連続の体験に、我—それという汝の対象化的把握が分節の体験に配当される。Gurvitch, G. の社会関係の基本的要素的（マイクロ）な形式としてのわれわれ (nous) と他者との関係 (rapport avec autrui) の区分も、このレベル⁸²⁾における、連続と分節の体験に対応させられよう。

また集団に個人が属するレベルでは、集団とのわれわれの一体感の体験が連続の体験に、集団と自己の緊張関係が分節の体験に対応させられるべきである。したがって前稿第2図の当該箇所は、上記のように修正されるべきである。 (以下次号)

注

- 1) 矢谷慈国、『「わかる」ということのもつ多層性について（Ⅰ）——弁証法的な身体現象学の立場からの基礎的考察——』追手門学院大学文学部紀要 第18号, 1984, 以下拙稿①と略記。
- 2) 中村雄二郎、『共通感覚論』岩波書店, 1979。
- 3) ブーバー, M., 『孤独と愛——我と汝——』, 野口訳, 創文社, 1958, 『人間とは何か』児島訳, 理想社, 昭和36年。
- 4) シュトラッサー, S., 『人間科学の理念——現象学と経験科学との対話——』, 徳永, 加藤訳, 新曜社, 1977。
- 5) 拙稿① pp. 75-81。注11), 参照。
- 6) メルロ・ポンティ『知覚の現象学1』竹内・小林訳, みすず書房, 1967。
- 7) Schutz, A., "On Multiple Reality" "Symbol, Reality and Society" in Collected Papers. I, The Hague Nijhot, 1962.
- 8) メルロ・ポンティ「哲学をたたえて」『眼と精神』所収, 滝浦・木田訳, みすず書房, 1966。
- 9) 矢谷慈国「多元的リアリティをめぐって（Ⅱ）——Alfred Schütz の理論の批判的検討から開かれる可知性の諸領域——」追手門学院大学文学部紀要 第16号, 1982. pp. 78-81, 以下拙稿②と略記。
- 10) ラントグレーベ, L., 「目的論と身体性の問題——現象学とマルクス主義をめぐって——」『現象学とマルクス主義 Ⅱ』ヴァルデンフェルス他著, 新田他訳 白水社, 1982。
- 11) 「丸ごと全体」ということばで野口三千三氏は市川浩のいう「身」と同じものを体操理論の立場から論じている。野口三千三, 『からだに貞く』柏樹社, 1977。『おもさに貞く』柏樹社, 1979。
- 12) 市川浩「〈身〉の構造」, 『講座・現代の哲学, 2, 人称的世界』, 所収, 田島他編, 弘文堂, 以下市川①と略記。1978『〈身〉の構造——身体論を超えて——』, 青土社, 1984, 以下市川②と略記。

「わかる」ということの多層性について（Ⅱ）

- 13) 市川②, pp. 36~41.
- 14) 市川浩, 「身体・家・都市・宇宙」(叢書, 文化の現在・2, 『身体の宇宙性』岩波書店, 1982, 所収)
- 15) 市川②, p. 47.
- 16) Litt, T., *Individuum und Gemeinschaft*, Leipzig Verlag u. Druck von B. G. Teubner. Berlin, 1926.
蔵内数太『社会学』, 培風館, 1962, pp. 149~152.
- 17) 市川浩, 『精神としての身体』, 勁草書房, 1975, 以下市川③と略記。
- 18) 市川③, p. 47.
- 19) 市川③, pp. 48-49.
- 20) 市川③, pp. 51-52.
- 21) 市川①
- 22) 市川②
- 23) 市川②, p. 44.
- 24) 市川①, pp. 126-146, 市川②, pp. 67-94.
- 25) 市川②, pp. 90-94.
- 26) 市川①, pp. 150-160.
- 27) 市川②, p. 20.
- 28) モース, M., 『社会学と人類学 I, II』, 弘文堂, 1977.
- 29) Gurvitch, G., *La Vocation actuelle de la Sociologie*, Press Unirersitaires de France, 1950.
- 30) 拙稿①, pp. 90-91.
- 31) Schutz, A., u. Luckmann, T., *Strukturen der Lebenswelt*, Luchterhand, 1975. pp. 54-60. 矢谷慈国,
「Alfred Schutz の生活世界論の理論的射程」, 『追手門学院大学大学創立十周年記念論集, 文学部編』1976,
pp. 289-291.
- 32) 市川②, pp. 58-66.
- 33) 市川②, pp. 58-59.
- 34) 拙稿②, pp. 75-81.
- 35) 市川②, pp. 59-60.
- 36) 市川②, p. 62.
- 37) 拙稿②, pp. 75-81.
- 38) 市川②, p. 11.
- 39) 市川①, pp. 161-172, 市川②, pp. 47-58.
- 40) 坂本賢三, 『「分ける」こと「わかる」こと——新しい認識論と分類学——』, 講談社, 昭和57年, pp.
192-201.
- 41) 拙稿①
- 42) 拙稿①, p. 84.
- 43) 市川③, pp. 8-26.
- 44) ヤスパース『大学の理念』, 森 訳, 理想社, 昭和30年。
- 45) メルロ・ポンティ, 前掲書。
- 46) 市川②, pp. 78-84.
- 47) 市川②, p. 81.
- 48) 市川②, pp. 79-81.
- 49) 市川②, p. 83.
- 50) 市川②, p. 93.

- 51) 市川③, pp. 13-19.
- 52) 市川②, pp. 53-54.
- 53) Schutz, "Symbol, Reality and Society."
- 54) 矢谷慈国, 「アルフレッド・シュッツの多元的な意味世界論と象徴の問題について」ソシオロジ vol. 22, No. 2, 1977.
- 55) 斎藤隆介『職人衆昔ばなし』文芸春秋 昭和42年。
小関智弘『粋な施盤工』, 風媒社, 1975, 『大森界限職人往来』, 朝日文庫, 昭和59年, 稲本正『オーク・ヴィレッジだより』, 講談社現代新書, 昭和59年。
- 56) 柳宗悦, 『柳宗悦集』(近代日本思想大系24, 鶴見俊輔, 編集, 筑摩書房, 1975。
- 57) フーコー, M., 『監獄の誕生——監視と刑罰』田村訳, 新潮社, 1977。
- 58) トフラー, A., 『第三の波』徳岡訳, 中央公論社, 1982。
- 59) いじめ, 登校拒否, 家庭内暴力等, 身近の子供たちに現われている現象は, すみずみまで管理された子供の体の反乱として理解すべきである。『少年補導』上記問題についての特集を参照。
- 60) イリイチ, I., 『脱学校の社会』, 東他訳, 東京創元社, 1977, 『脱病院化社会』金子訳, 昌文社, 1979, 山本哲士, 『学校・医療・交通の神話』, 新評論, 1979。
- 61) バーガー, P., 『犠牲のピラミッド』, 加藤他訳, 紀伊国屋書店, 1976, メドウズ D.H. 他著, 『ローマクラブ「人類の危機」レポート, 成長の限界』大来佐監訳, ダイヤモンド社, 1972。
- 62) 拙稿①, pp. 81-83。
- 63) 市川②, p. 13。
- 64) 市川②, p. 23。
- 65) モース, 前掲書。
- 66) フーコー, 前掲書。
- 67) ホール, E., 『かくれた次元』日高他訳, みすず書房, 1974, ティンバーゲン夫妻, 『自閉症・文明社会への動的行動学的アプローチ』, 田口訳, 新書館, 1976, ローレンツ, C., 『攻撃』日高他訳, みすず書房, 1974, アイベススェルト『プログラムされた人間』, 霜山他訳, 平凡社, 1977, Blacking, J. ed, The Anthropology of Body, Academic Press, 1977, ルークス, F., 『肉体・伝統社会における慣習と知恵』, 蔵持他訳, マルジュ社, 1983, 野口三千三, 前掲書, 竹内敏晴『ことばが劈かれる時』思想の科学社, 1975, 『子どものからだとことば』昌文社, 1983, メルロ・ポンティ前掲書, マルセル, G., 『形而上学日記』三嶋訳, 春秋社, 1981, Waldenfels, B., Der Spielraum des Verhaltens. Surkamp, 1980, フーコー, 前掲書, 多木浩二『生きられた家』田畑書店, 1976, 阿部謹也『中世の窓から』朝日新聞社, 1981, 『中世を旅する人びと』平凡社, 1981, 『中世の星の下で』影書房, 1983。
- 68) 筆者の研究の最終的な目標は, 単なる本読みの理論的枠組作りではない。自前の理論的枠組による自前の経験的研究, 本来の意味での経験的事例研究(Gurvitch, G. が, Heiper-Empirisme とよんだ意味での)にあることを表明しておきたい。
- 69) Luckmann, T., "On the Boundaries of the Social World" in Natanson, M. ed. Phenomenology and Social Reality, The Hague Nijhof, 1970.
- 70) Husserl, E., Die Krisis der europäischen Wissenschaft und die transzendente Phänomenology, Haag, Nijhof, 1962, 邦訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷, 木田訳, 中央公論社, 1974。
- 71) 『宮沢賢治全集 第十一巻』筑摩書房, 昭和34年。
- 72) 合田 濤編『認識人類学』(現代のエスプリ別冊, 至文堂, 昭和56年)。
- 73) 市川②, p. 12。
- 74) 市川①, pp. 161-164。

「わかる」ということの多層性について (II)

- 73) 市川①, pp. 164-169。
74) 市川①, pp. 169-172。
75) 市川①, p. 162。
76) ピアジェ『知能の心理学』波多野・滝沢訳, みすず書房, 1965, ヴィゴツキー, 『思考と言語』上・下, 柴田訳, 明治図書, 1969, ワロン, 『子どもの思考の起源』上中下, 滝沢岸田訳, 明治図書, 1969~71, エリックソン, 『幼児期と社会1, 2』仁科訳, みすず書房, 1980, ミード. G.H. 『精神, 自我, 社会』稲葉他訳, 青木書店, 1973, パーソンズ, 『家族—核家族と子供の社会化』, 橋爪他訳, 黎明書房, 1981, バーガー夫妻, 『バーガー社会学』安江他訳, 学習研究社, 1979, ミード. M., 『男性と女性 (全2巻)』田中他訳, 東京創元社, 1961, ベネディクト. R., 『文化の型』米山訳, 社会思想社, 1973, メルロ・ポンティ「幼児の対人関係」, 滝浦・木田訳, 『眼と精神』みすず書房, 1966, 市川浩, ①, ②, ③。
77) Schutz, A., “Common-Sense and Scientific Interpretation of Human Action” in *Collected Papers*, vol. 1, Nijhoff, 1967, pp. 12~13.
78) Litt, T., *ibid.*
79) Schutz, A., *Collected Papers*, vol. 1, p. 315 の foot note 33, 参照。
80) Schutz, *ibid.*, p. 99.
81) 矢谷慈国, 「体験における社会と文化の問題——認識我と体験我——(1), (2)」『関西学院大学社会学部紀要』, 第19号, 第20号, 1970。
82) Gurvitch, G., *ibid.*